

研究結果報告書

研究結果

本研究の目的は、稲作技術の国際移転を中心とする中日両国の国際農業協力への取り組み実態を比較・分析し、その共通点と相違点を明らかにしようとするものであった。

結論から言えば、中国における稲作技術の国際移転は、日本のそれと比較すると、その移転方法や移転手段などの面ではまだまだ未熟であり、日本から学ぶべき点が数多くあることが明らかになった。

まず、中国では、広西福福沃徳農業技術合作有限会社、安徽省袁氏農業發展有限会社、黒竜江省太非華援農業開発有限会社、江蘇省明天種業科技有限会社、重慶中一種業有限会社、福建省福清市嘉叶現代農業開発有限会社、雲南金瑞種業有限会社、広東省農業科学院作物研究所といった企業7社と1つの研究機構に対して、稲作技術の海外移転の展開の実態について調査を行った。

次に、日本では、日本国際協力機構（JICA）、国際農林水産業研究センター（JIRCAS）、海外農業開発コンサルタント協会（ADCA）、東京農業大学国際食料情報学部を訪問し、稲作技術の海外移転について調査を行い、また、彼らの経験やアドバイス等有益な情報を聴取した。

社会・経済的發展段階の最も遅れた国・地域に対する稲作技術移転の方法に関し、中日両国を比較すると、第一には、両国とも人的支援/交流と物的支援の両方を実施しているが、日本では、人的支援に重点が置かれていることが明らかになった。第二に、普及員と農民との接触の仕方に関し、両国とも間接的及び直接的方法をとっているが、日本では、技術水準の低い農民が対象の場合には、主に直接的方法で指導している実態が明らかになった。さらに、日本では、普及手段において、展示圃場、パンフレット、講習会・研修会、評品会などだけではなく、映画、紙芝居、漫画と云った農民の視覚に直接訴える手法や手段を使っていること等が印象的であった。

今後、中国の稲作技術の国際移転においては、こうした日本の有益な経験を参考にして、十分な理解と熱意を持った普及員の養成/訓練が重要である。更には、長期的視点に立って、指導する農民のレベルに合わせた移転技術や移転方法あるいは普及手段を検討していくことの重要性を認識することが、中国の課題と言えるであろう。

以上

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表（題名・発表者名・会議名・日時・場所等）

「日本稲作技術的海外転移（日本における稲作技術の海外移転）」・楊東群・中国国外農業経済研究会（中国農業科学院農業经济与發展研究所と中国社会科学院農村發展研究所主催）・2012年11月3日・北京

論文（題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等）

1. 「日本国際農業協力的経験と啓示（日本における国際農業協力の経験および中国への啓示）」・楊東群・日本学刊（中国社会科学院日本研究所、中華日本学会出版）へ投稿中
2. 「中国国際農業援助的現状と課題（中国における国際農業協力の現状と直面した課題）」・楊東群、邱君、李保花・経済与管理研究（首都経済貿易大学出版）へ投稿中

書籍（題名・著者名・出版社・発行時期等）